

## 第21回県政知事懇談

# 湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成23年1月8日（土）

ところ 安芸府中生涯学習センター「くすのきプラザ」

広 島 県

目 次

頁

開 会 .....	1
懇 談 .....	2
自由討論 .....	36
閉 会 .....	45

## 開 会

(知事(湯崎))

皆様こんにちは。県政知事懇談「湯崎英彦の宝さがし」を始めさせていただきたいと思  
います。

まずは、本日 10 名の懇談会参加者の皆様、お忙しいところお時間をいただきまして本当  
にありがとうございます。また、本日たくさんの傍聴の皆さんも、土曜日にもかかわらず  
こうやってお時間を割いていただきまして、本当にありがとうございます。

始まる前に少しだけこの会の趣旨をお話しさせていただきたいと思  
います。

私は、広島県内の 23 の各市町をこうやって回らせていただいております。県の仕事は町  
や市といろいろやりとりをすることは多いのですけれども、住民の皆さんと直接お話をす  
る機会というのはなかなか少なく、私としても各市町の皆さんと直接お話を  
する機会を持ちたいということでやらせていただいております。

目的としては、何か個別の課題を解決していきましようということではなくて、普段皆  
さんがいろいろお感じになっていることをお伺いする。10 名ずつぐらいお話を聞いてい  
くと、200 人を超える住民の方とお話ができます。そういう中で、普段県民の皆さんがど  
ういうことをお考えになっているのかということをつめていくとか、全体としてそれ  
をとらえていくという形で考えております。よくたとえて味噌樽というふうに言うので  
すけれども、いろいろな皆様のお話を味噌樽のようにためて熟成させると、ぐるぐると混ざ  
っておいしいお味噌ができて、県政のいい味付けができるのではないかと、そういうもの  
でござい  
ます。県政の隠し味とか、味の基盤になるようなものにしていき  
たいと思っ  
ているところ  
です。

そういう意味で、皆様が日ごろお感じになっていることを忌憚なくおっしゃっていただ  
くのが一番いいです。化学調味料が入っているよりも、自然な御意見をそのままおっしゃ  
っていただくのが我々としてもありがたいと思  
っています。

行政からの御意見というのは別途、市長懇談、町長懇談というのをやっております。こ  
の二つで地域の御意見をいろいろ伺っていき  
たいと思っ  
ています。

これからの進行としては、全体で 2 時間ほどお時間をいただきます。最初 1 時間半ほど  
皆様お一人お一人にお話をいただいて、やりとりをさせていただきます。1 人 5 分ぐ  
らいを  
めどにやりますと、50 分ぐ  
らいなの  
ですけれども、なぜか 90 分ぐ  
らいかか  
ります。残  
りの 30 分、これも時間が余ればということ  
ですけれども、10 名の皆様全体でやり  
とりを  
させて  
いただく  
という形  
で進め  
させ  
て  
いただ  
きたい  
と思  
います。これは目安ですので、大  
体 90 分  
という  
ことで、そこはあまり気にせず進め  
させ  
て  
いただ  
きたい  
と思  
います。少々、特に傍聴の皆様には長くなり  
ますけれども、よろしくおつき  
合いを  
願  
い  
いた  
し  
ます。

## 懇 談

(知 事)

それでは早速始めさせていただきます。最初は田中さんからお願いします。

(田 中)

こんにちは。「ポパイの会」の会長をさせていただいています田中です。よろしくお願いします。

(知 事)

よろしくお願いします。さっきと全然印象が違うので。

(田 中)

ちょっとよそ行きを着てきました。

(知 事)

私もいつもは普段着で来るのです。朝、お茶の初釜があったものですからスーツで来ていますけれども、普段どおりに意見をおっしゃってください。お願いします。

(田 中)

はい。よろしくお願いします。

自分は上がり症なのと、トップバッターということで、しゃべりだしたら何を言っているか分からなくなってしまって、1人で90分を使ってはいけないので、原稿を用意してきましたので最初は読ませてもらいます。

ポパイの会について簡単に説明させていただきます。平成21年、府中町に待望の児童センターがオープンしました。ポパイの会は、地域や保護者と児童センターのつながりを強め、地域の子どもは地域全体で見守り育てていくため、子育てを支え合うことのできる環境や子どもの居場所づくりを目指して、昨年6月に設立しました。活動としては、地域の方々と児童センターが一緒になって、地域の子どもたちのための取り組みや、親同士が交流できる機会づくりを行っています。また、日々の活動をよりよいものにしていくため、毎月第4金曜日に児童センターで定期会議を行っています。その内容は、ポパイの会が主催する行事の発案と計画、さらに、児童センターとの情報の交換、定期会議の後には地域の防犯組合連合会の皆さんと一緒に非行等を未然に防止するために夜の見回り活動を行っています。

また、児童センターの主催する行事、B級グルメ、子育て力アップ事業、イクメン

交流会などにも積極的に参加しています。原稿は以上です。コンパクトにまとめてきました。

(知 事)

ありがとうございます。実際に、田中さんはその前にもこういった子育てにかかわる活動というのをやっていたらっしゃったのですか。

(田 中)

そうですね。うちは事情があって父子家庭ということがあって、娘2人は自分1人で育てました。育児に関してはもう主夫です。その関係で、父親が参加できるPTA活動ということで、小学校時代に男性サポーターというのが小学校にあったのです。子どもにできることをということで、いつの間にやらPTA会長にさせていただいて、その縁で、中学校にあがってまたPTA会長をさせていただいて、そういう子育ての環境づくりにはいろいろと参加させていただいています。

(知 事)

そこで、またこの児童センターができれば白羽の矢が立って。

(田 中)

そうですね。

(知 事)

ポパイの会自体は、住民の皆さんでこれをやろうという感じでできたのですか。

(田 中)

きっかけとしては、児童センターが、今はやりと言ってはいけないのですけれども、民間委託ということで、ワーカーズコープのほうで運営をしてもらっています。スタッフの若い人たちはみんな一生懸命やっただけなんですけれども、やっぱり地域の情報が入らないので、地域とのパイプ役となる会をつくってほしいということになりました。近くに南小学校があるのですけれども、PTAに話があって、自分が呼んでいただいたという形です。

(知 事)

あそこにいい人がいるぞと。

(田 中)

そうですね。

(知 事)

そういう意味では元祖イクメンで、ずっと携わってこられたということですね。

(田 中)

はい。

(知 事)

実は今日、ポパイの会の活動を、午前中に少し拝見させていただいたのですけれども、今日いらしていたのは老人会ですか。

(田 中)

そうですね。府中町の老人クラブ連合会の皆さんにお手伝いいただいて。

(知 事)

老人クラブの皆さんととても楽しそうに餅つきをされていて、みんなにこにこしていて、いい感じだなと思ったのですけれども。

(田 中)

どうしてもこういう会をつくったら、やることに一生懸命になって、実際に自分たちが楽しめるということが少なくなってくるのです。ポパイの会のモットーは、やる自分たちも楽しくやろうということで、B級グルメとかにも参加させてもらったのです。最初は、参加してもらえないかという形で、B級グルメといっても御飯をつくったことないですよと言いながらも、やり始めたらのめり込んで、みんなで楽しくやらせていただきました。

(知 事)

活動の参加者の確保と言うのですか、それについては御苦労されることはないですか。

(田 中)

一応名簿には26名いるのですけれども、いつも行事とか、何かするときに参加していただけるのは十数名程度と、やはり固定したメンバーになってしまうのです。最初は、児童センターを地域の人とかに広く知ってもらおうということで、パイプ役とか、PR隊ということをつくったのです。ところが、児童センターのほうは地域の人に認知されたので

すけれども、逆に、ポパイの会の認知度が低いまま、一般の参加者をいかに集めるかという問題を抱えています。来たら楽しいのは分かっていたと思うのですけれども、まず、1回来てもらうところに結構苦勞しています。

(知 事)

女性がこういう子育てサークルのようなことをやられているのは多いのですけれども、ポパイの会は男性会員のほうが多いですね。

(田 中)

そうですね。女性の会員の方もおられるのですけれども。

(知 事)

おやじの会だと男性ばかりで、子育てサークルだと女性がほとんどなのですけれども、こちらはミックスで男性がやや多いとお見受けしたのですけれども。

(田 中)

そうですね。つくったときには、今、言われた児童センターのおやじの会的なものということだったので、極力男性の方に参加してもらって、餅つきや、いろいろ力仕事をしてもらっていました。ポパイの会のネーミングが縁の下の力持ち、いざというときには力を貸しますということのでつくったので、男性のほうが頑張っています。

(知 事)

男性の育児参加は大事ですから、是非よろしくお願いします。ありがとうございました。それでは、樽谷さん、お願いします。

(樽 谷)

府中町で生まれて、府中町で育って 63 年です。教員をしておりました。3 年前に退職して、現在は陸上競技協会であるとか、府中町で好きな陸上のお世話をしています。今日ここには青少年育成町民会議の会長ということで来させていただきました。今日初めて、控え室で皆さんの活動を見ていたら、同じような活動をしていらっしゃる方が多いなと思いました。青少年育成町民会議も県民会議の下部組織という形になるわけですけれども、府中町の場合も、青少年が自主性と創造性に富んだ人間性たくましく成長することが町民の願いであるということで、学校、家庭、地域、行政の関係機関が一体となって、親、大人が変われば子どもが変わるのではなかろうかということをもットーに、町民総ぐるみで青少年活動に取り組んでいるところです。今日は町内会の代表の方も来ていらっしゃいます

が、町内会、PTA、学校、婦人会、女性会、体育協会、民生児童委員さん、保護司さんや、老人クラブの皆さんにお世話になりながら、町民会議を運営しております。

大きくはあいさつ運動ということで、日ごろから皆さんにやっただいてはいるのですが、町民会議としては、青少年の日ということで、毎月17日に、各小学校、中学校、高校の近く、通学路であるとか、そういうところに立って子どもの見守り、あいさつ活動をやっております。今は大人ばかりではなくて、小学生も自主的に自分たちも校門の前であいさつをしようというふうなことを言ってくれている学校も何校かあります。

それから、青少年の行事として、こども祭りというのが12月、それから、あさってですけれども新春カルタ大会があります。この二つの行事は、大人が指導するのではなくて、大人は支援的なことのみで、小学生を対象に、中学生、高校生に指導していただくということになっています。今日増原さんが来ておられますが、高校生の方が中心になって、こども祭りは一緒に運営、指導していただく。あさってある新春カルタ大会は、中学生が中心になって、中学生が司会進行であるとか、すべてを中学生に任せてみる。大人はそれを見守って指導していただくという立場で行事を進めているのが大きな特徴かなと思います。

(知 事)

それは、府中町が特徴的にやっているのですか。

(樽 谷)

そうです。府中町の新春カルタ大会で、府中町の子どもたちです。

(知 事)

何と言いますか、中学生が司会をして、上級生が下級生の面倒を見ながらやるというやり方は府中町独自のものですか。

(樽 谷)

独自のやり方です。

もう一つは、今年は青少年育成県民会議の夢配達人プロジェクトというのがあるのですが、それに府中小学校の子どもが応募して選ばれました。その中で、今年は、原爆の話を聞いて、それに子どもたちが作詞をし、作曲家につくっていただいて、みんなで歌おうというのが子どもの夢だったのです。府中町出身の吉川晃司さんをお願いして作曲していただいて、それが実現できたということです。11月に発表会があったのですが、それを全校生徒が歌うというイベントが今年の大きな特徴としてはあったと思っています。みんな喜んで、一生懸命になって歌っておりました。以上です。



(知 事)

ありがとうございます。樽谷さんは、学校の先生でいらっしやったということですから、小中高で言うとどちらに。

(樽 谷)

中学校です。

(知 事)

府中町だったのですか。

(樽 谷)

府中町もかわりましたけれども、海田中学校と、府中町では、教諭、教頭、校長ということですからすべてを経験させていただきました、最後は江田島市のほうに参りました。

(知 事)

そうですね。先生をやっておられて、実際に府中町でも他の市町でもやられたということであればよくお分かりだと思うのですが、子どもたちの特徴というのは、地域ごとに違ったりするものですか。

(樽 谷)

違いますね。全然違うと思います。

(知 事)

府中町はどうですか。

(樽 谷)

府中町に中学校は2校あるのですが、2校でも違う。昔の話で、海田町から府中町に来たときには、府中町の子はちょっと都会的だなという感じを受けたのです。すごいなという思いだったのです。私が教員をしていたときは荒れていたときだったので、すごく大変な思いをしたのですが、生徒も、こっちの子は都会的というか、広島市に近いということもあって、発展的でした。江田島市に行ったときは小規模校で、今までずっと大規模校だったのですが、小規模校というのは至れり尽くせりで、いいなと。二十四の瞳ではないですが、これが学校教育だなというふうな思いはしました。

(知 事)

私もこういう形でいろいろな地域にお邪魔していると、やっぱり田舎の学校というのは小規模で、地域の皆さんの目がすごくよく行き届いていて、ある意味ではいい教育だなと。ただ、やっぱり人数が少ないハンディーはあると思うのです。大きな地域、特に府中町などはそうだと思うのですが、それはまた違うよさがあるだろうと思いつながら、なかなか実はそういうお話を聞く機会がなかったのです。府中町のよさ、都会の学校のよさというのはどういうところでしょうか。

(樽 谷)

府中町は苦勞したことが多かったのですけれども、割と子どもたちが活動的なのです。何事もすごく一生懸命に取り組むのです。だから、みんなが必死になってやる。特に部活動に関してはとても熱心で、生徒も先生も一生懸命になってやっておりますので、割といい成績をおさめたりして、それが活力、エネルギーになっているなど。

(知 事)

切磋琢磨がいろいろなところで起きるとのことですね。

(樽 谷)

そうですね。それは大切なことだと思います。それが小さい学校にはないのです。だから、そういう点ではいいです。

(知 事)

仲はいいけど、競い合うというのは少なくなる。

(樽 谷)

そうですね。そういう点はあると思います。

(知 事)

分かりました。今日、青少年育成県民会議の会長の上田さんとお会いしてきたのです。その初釜があったのですけれども。

(樽 谷)

私も今日初釜だったのですが、欠席してこちらに来ました。

(知 事)

そうですか。失礼しました。

先日、対談をさせていただきまして、今度会報に載りますので、またよろしくお願ひします。今日は御協力どうもありがとうございます。

(樽 谷)

こちらこそよろしくお願ひします。

(知 事)

それでは、山田さん、お願ひいたします。

(山 田)

総合型地域スポーツクラブ「呉袈々宇（ごさそう）スポーツクラブ」の責任者をしております山田です。当クラブは、行政の指導により2年間の検討委員会を経まして、平成18年に発足しております。その目的は、町民すべてにおいて、体を動かし健康に貢献できる団体ということでやっております。今のところ順調に進んでいるのですが、どうしても年齢とか時間の中で参加者が少ないところも見受けられます。それと、この活動を継続的に進めていくには、やはり先を見越した対策が必要ではないかと考えております。以上、そういうことで活動しております。

(知 事)

ありがとうございました。山田さんは、もともとスポーツとはどういうかわりでいらっしやったのでしょうか。

(山 田)

スポーツとはあまり関係がないのですが、現職は建設コンサルトで、測量から設計をやっています。県の廿日市ニュータウンは私が設計しております。廿日市、可部の虹山、そこらは私が設計をやっております。

建設コンサルトは、旅回りの仕事が多いものですから、家族との生活が少ないのです。それで、子どもとのつき合いということで、たまたま行政で、当町で剣道教室というのを開催される運びになったときに、子どもを連れて、短い期間ですが、子どもと一緒に剣道を始めたのがスポーツのきっかけで、現在もその剣道クラブの責任者をやっております。

(知 事)

そういうことですか。当時は御自分も剣道をやっておられなかったけれども、そこから始められたのですか。

(山 田)

そういうことです。それで、今の総合型地域スポーツクラブを立ち上げるのに、委員会の一員に入れていただきまして、そのまま責任者として残れということで現在に至っております。

(知 事)

なるほど。では、どちらかという、スポーツ指導者というよりは、自分がやっていた中でかかわっていかれたということですね。

(山 田)

そういうことですね。それでずっと長年やっておりますものですから、そのまま残って責任者をやれということで、今やっているわけです。

(知 事)

地域の健康づくりや、地域全体でスポーツに取り組む活動ですが、いかがですか。昔の子どもと今の子ども、あるいは高齢者の方とか、何かお気づきになるようなことはございましたか。

(山 田)

長年剣道を通じてですが、子どもとのかかわりを持っておりまして、我々の子どもと比べると比べて現在の子どもというのは基礎体力的に劣るのではないかと。例えば、つまずいで転んだ場合に、我々の子どもと比べると顔にけがをすることはなかった。支えるので手をけがすることはあっても、顔をけがすることはないので、現在の子どもはほとんど手をつくことを知らなくて、顔をけがする。腕立てなどをやらせましても、基本通りの腕立てができない。おしりを上げたり下ろしたりするだけの腕立てになっている。腕の力が少ない。そういうようなことが見受けられるので、できるだけ子どもたちに基礎体力をつけようということで剣道では指導しているところです。

(知 事)

高齢者の方々にかかわられることも多いと思うのですが、高齢者の方のスポーツというのは活発なんでしょうか。

(山 田)

はい。当クラブの事業につきましては、たまたま町の揚倉に芝生グラウンドがあります

ので、そこでグラウンドゴルフをとということで、どなたでも参加できるような形で、1回100円ということではしているのですが、週に1回やっています。大体100人程度ぐらい、年に2回ほど大会をしますが、府中町以外のところからも参加されて、なかなか人気があります。そういうのを聞きつけて参加される人は十分なのですが、そこへ引っ張り出すのにどうしたらいいかというのがこれからの課題だと思うのです。やはり家に閉じこもっておられる人たちを引き出して、健康につなげるべきではないかと思っております、そこらを今はPR活動をしているのですが、なかなか、顔見知りの人ばかりになるということで、新しい人が少ないです。

(知 事)

なるほど。きっと御自分で運動されている方というのは、いろいろな形でされていて、特に府中町という場所柄からいくと、一般のスポーツクラブに入ることもできるし、野球のシニアチームとか、いろいろな選択肢があるのでしょうか。けれども、家に引きこもってしまっている方々をどうやって引き出すか、健康づくりに参加していただくか、というのはこれからの課題ですね。いろいろ御苦勞されていると思うのですけれども、そういう課題には、こういう総合型地域スポーツクラブというのはぴったりかなという気もするのですが、やっぱりそうですか。

(山 田)

閉じこもっている人をいかにということですから、そういった人たちを仲間同士で支え合って出てきていただけるように、垣根を低くして、いつでも参加できるようなスタイルをとっているわけです。

(知 事)

地域のつながりというのが都会では薄くなりがちで、去年も「無縁社会」という言葉がありましたけれども、最近では地域とのつながりがないと、ほかにはなかなかつながりが難しいということもあろうかと思うので、是非いろいろ御活動いただけるとありがたいと思います。

(山 田)

そういうこともありますし、お手伝いしていただくスタッフの人数と質という面も多々問題があると思います。スタッフも長続きしないというか、いろいろなお仕事をしておられますので、出入りが激しいものですから、そこらの調整も苦勞しているところです。

(知 事)

ありがとうございます。また是非いろいろ健康づくりに御協力いただけるとありがたいです。よろしくをお願いします。

(山 田)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは、山本さん、お願いいたします。

(山 本)

夢プラン・食育プラン実践プロジェクトチームの副会長を務めます山本と申します。よろしくをお願いします。私たちは府中町の健康増進、及び食育推進計画に基づき、実践活動を行う町民参加型のグループです。この計画は平成16年度より10年計画で行われています。事務局は福祉保健部の健康推進課にありまして、そちらで私たち町民と一緒に企画書づくりでありますとか、会議の進め方など一緒に学びながら、しょっちゅう分からないこともあるのですけれども、そういったことは相談に乗っていただきながら、このプランに協働で取り組んでいます。

プロジェクトの仕組みとしては、毎年自分たちが立ち上げたい企画を店開き方式と言うのですけれども、それで披露して仲間を集めています。年間の活動をそれからスタートして、企画書づくりから始めて、実施、それから評価、見直しといったことを行って、次年度につなぐという、そういう一連の流れで進めています。今年度は九つのグループが立ち上がっています。

そのグループの活動内容を簡単に説明させていただくと、三つに分類されるのではないかと思います。まず第一は、生き抜く力をつけるということ。食べ物を通して命の大切さを知っていただいています。二番目は世代間交流、地域や自然、府中町のこの自然との触れ合いとか、それから地域、資源との連携といったようなことを行っています。三番目は、自分の体験や経験を生かし、地域に広げる。情報伝達をして、地域の輪を広げるといったことなどです。チーム全体としてはそういう活動をしている中で、新たな課題とかニーズを見つけて解決していくということに取り組んでいますし、また、地域へ健康づくりとか食育の輪を広げるといったことも行っています。例えば参画者を増やすというのは毎年のように行って、少しずつ改善していっているのですけれども、なかなか難しい課題です。前年度は登録制度というものを導入しまして、11の団体が登録してございまして、現在はそういった団体と意見交換をしたり、課題の共有を行って連携を図っているところです。

プラン策定から今年度は7年目なのですけれども、初めて健康づくりのイベントを来月の2月27日に予定していて、それに向けて今、みんなで取り組んでいるところです。

(知 事)

ありがとうございます。今日、実はその中の一つですか、椿と民話のグループの皆さんのところにお邪魔したのですけれども、非常に活発な活動を結構長い期間やられていらっしゃるのですよね。

(山 本)

そうですね。多分最初からではないかと思うのですけれども、その辺はちょっと分からないですが。

(知 事)

民話を集められたりとか、布絵本をつくられたり。

(山 本)

つくられていますね。昨年何か賞をいただいたということです。

(知 事)

そうですね。お伺いしていると、民話の専門家はこの方とか、地名の専門家はこの方とか、いろいろいらっしゃるっておもしろいなと思ったのですけれども、あのようなグループが幾つか立ち上がっているということですね。

(山 本)

そうなのです。食育に関するような「いただきますグループ」とか、「食体験班」とか、食を考えてその大切さを伝えていくというグループもありますし、先ほど申しましたように府中町という地域柄を生かして、地域の資源といいますか、人であったり、自然であったり、そういうところを生かして活動されたりしています。

(知 事)

活動としては、例えば食育というのは子どもたちとのかかわりが出てくるのかなと思うのですけれども。

(山 本)

そうですね。子どもさんもですけれども、御年配の方とかもあります。

(知 事)

御年配の方の食事を通じた健康づくりですか。

(山 本)

そうですね。年齢に限らず、自分の健康を考えるときに、食事というのはとても大事なことですよね。その辺のところ、グループが今は三つほど、そういったことに取り組んでいるグループがあるのです。

(知 事)

先ほど生き抜く力をつけるとおっしゃっていた部分だと思いますけれども、私がぱっとお聞きした印象が、食育とか朝御飯という、子どもたちという印象だったのですけれども、そういうわけではないということですね。

(山 本)

もちろん子どもたちに対して、例えば広島はお好み焼きで有名ですけれども、お好み焼きのつくり方を教えたりとか、朝御飯をしっかり食べて行きましょうとか、そういう学校に出向いて教えるグループもありますし、いろいろなグループがあります。

(知 事)

私は逆に自分のイメージとして、食育イコール子どもというイメージで言ったのですけれども、必ずしもそうじゃないということなのですね。そこに課題があるということですか。

(山 本)

はい。

(知 事)

御年配の方でも食事に気をつけたほうがいいと。メタボとか、そういうのは別としてね。

(山 本)

そうです。この食事のこととは外れますけれども、メタボなどに対する取り組みをしている班もあります。メジャーレンジャーと言います。

(知 事)

そうですね。おっしゃるとおり、人間、食べたもの以上には絶対にならないけれども、食べたならその分身になってしまうということがあるので、健康的なものを食べるというの



が一番ですから、これは一生を通じて大事なことですよね。

ありがとうございます。9 グループ全体で幅広い活動をされていますので、是非引き続き頑張ってくださいと思います。

(山 本)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、米田さん、お願いいたします。

(米 田)

社会福祉法人「福祉の郷」の代表になっております米田でございます。よろしくお願いたします。

サラリーマン生活を 40 年ぐらいやりまして、東京から、大阪、岡山、広島まで異動してきました、沖縄まで行くのではないかと思いましたがけれども、広島で止まりまして、現在、府中町に住んでおります。

社会福祉法人「福祉の郷」は、障がい者が生きがいを持って府中町で暮らせるよう、障がい福祉サービスを提供する運営主体でございます。昨年 8 月創設の法人として知事より認可をいただきました。本当にありがとうございます。

府中町には障がい者の施設が少なく、近隣の施設でお世話になっているのが現状でございます。長年の願いが叶い、実を結ぼうとしています。現在、なないろ作業所の新設工事を行っております。多機能型通所施設として 4 月から運営予定でございます。障がい者の福祉サービス事業は、医療事業とか老人介護事業と異なり、ビジネス目的ではありません。小さな作業所が集まり、家族だとか、支援団体が一体となり、行政の御支援をいただきながら設立され、障がい者の福祉向上のための事業であり、運営的に厳しく、より一層の御支援をよろしくお願いいたします。

気づいたことですが、行政を知らない素人の立場からお話ししますと、福祉向上のために行政にいろいろなことを申請しますが、障がい者に提供するサービスの内容で県の認可、例えば生活介護であるとか、就労支援だとかあります。それと、府中町でする認可、サービスの内容でございますが、相談支援だとか、自立活動支援等があります。利用する立場からしては一本化がうれしいと存じます。

余談ではございますが、知事は給与制度の改善に取り組み、大変御尽力されております。学歴だとか年功序列によらない成果主義というので、職員に理解いただくのは大変と思います。民間の会社では当たり前なのですけれども、住民の生活、福祉、環境の向上の

ために今後とも頑張っていたきたいと思います。

(知 事)

ありがとうございます。今、一本化のお話がありましたけれども、確かに行政はいろいろな理由で町と県で様々に役割が分かれています。基本的には一本化、即ち権限移譲を進めていまして、まだこの福祉施設に関する権限移譲というのは、どの市にもどの町にもしていないのですけれども、将来的には権限移譲を進めて、なるべく住民の皆様に近いところでそういった手続きができるように進めたいと思っております。しばらくはいろいろと御面倒をお掛けしますけれども、よろしく願います。

(米 田)

パスポートなどでも、今までは県庁の東館のところに行っていたのですけれども、今は府中町でもできるようになりましたので楽になりました。

(知 事)

そうですね。全体としては権限移譲を進めておりますので。広島県は実は日本では一番権限移譲が進んだ県なのです。たくさんの方が市や町に権限移譲されていまして、ただ、たまたま今の福祉、特に施設に関する認可というのは県にまだ残ってしまっているのですけれども、基本的にはこういった流れは続けていきたいと思っております。

40年間サラリーマンをされていて、福祉施設を始められたきっかけというのは、どうしてそうお考えになられたのですか。

(米 田)

家族が障がい者でありまして、府中町に来まして、10年前から障がい者の施設をつくろうという願いというか、計画がありまして、たまたま私が3年前に携わって、たまたま代表になっただけでございまして、そういういきさつがございます。

(知 事)

御家族の関係からということですか。

(米 田)

はい。

(知 事)

それまではいろいろ転々とされていて。

(米 田)

そうですね。ですからほとんど単身赴任でした。

(知 事)

そうですね。お生まれになったのはどちらですか。

(米 田)

鳥取県です。

(知 事)

では、広島に来られたのは初めてで。

(米 田)

それも偶然です。

(知 事)

府中町にたまたま来られて、そこから根を張られたと。

(米 田)

そういうことです。

(知 事)

なるほど。分かりました。また後でいろいろお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

小柴さん、お願いいたします。

(小 柴)

皆様こんにちは。よろしく願いいたします。府中町国際交流協会の副会長をしております小柴と申します。

この会は、設立されましたのが平成3年ですので、ちょうど今年で20年になります。ただ、設立当初は、私は全然かかわっておりませんでしたので、設立当時の方から伝え聞いたお話ですが、町のほうから府中町の国際化に寄与するような団体、あるいは、そういう組織をつくりたいということで、そのお願いが当時の府中町商工会のほうにあったそうで、その府中町商工会の地元の事業主さんたちが自費を投じられた方もいらっしゃるそう

ですが、町の補助を受けながら設立されたそうです。

その5年後に私はたまたま一会員として参加させていただいたのですけれども、動機は、単に外国の人とちょっと友達になれたらいいなぐらいの気持ちで入らせていただいたのです。当初は地元の企業も、日本全体も元気があって、欧米人の方を中心に、マツダの企業町ですので外国の方が社宅にいらしたりした関係上、そういう方を招いての府中町国際交流協会としての交流会、パーティーなどがありまして、そういうところに参加させていただいていました。在日のこの町に住んでいらっしゃる外国人の方が里帰りするそのお国へ会員の人と一緒に連れて行くというような海外研修というものもございました。そういうものが大体10年ぐらい続いていたのですけれども、その後、商工会自体、日本全体の勢いも多少なくなってきたということもありますし、だんだんとメンバーも固定化して、あるいは少なくなっていった、ということで、ちょうどそのころ県のほうで日米草の根サミットという、県から移譲された大きなプロジェクトをきっかけに約10年前に理事になりました。

そのころから、先ほど申したようにパーティーをし、海外研修をし、料理教室をするというような同じ行事の繰り返しでは年数が経っている割に、なかなか府中町内に浸透していかないということもありますし、当時は、どちらかという、外国の方をお招きして、お客さんのように接して交流するということでした。ですが、10年前あたりから、そうではなく、隣に外国人の方が住むという現実が身近なものに皆さんなつてこられる中で、もっと町民の人に近づいて、外国人ではなく、日本人ではないけれども日本に住む隣の人という気持ちで接するには、どういう行事、あるいは皆さんの意識を変えていくにはどうすればいいかということを考えるようになりました。例えば外国人とスポーツを通してやればもっと近づけるのではないかと、あと、安芸府中高校には県立で唯一の国際科というのがございますので、そこに来る中長期、短期の留学生との交流会をしています。また、中学生にまず世界の共通語である英語暗唱をしてもらって、英語の力を付けて、その会の中で外国人に日本語でスピーチをしていただいて、それも同時に中学生や参加した方、あるいはほかの観覧に来られた町民の方に直接話を聞いてもらって、どういうところで苦労したとか、そういうところも聞いてもらって理解を深めていただく。少しずつ年によって、あるいは、取り巻く社会状況に応じて、行事とか企画を変えていかないと、本当に地に着いたというか、皆さんに身近に感じてもらえる国際化というのになかなかならないというのがこれからの課題でもあります。

ちょうど3年前にこのくすのきプラザができたと同時に、商工会にありました事務局をこの2階に移転させていただきまして、それまでは商工会の事務局長さんに国際交流協会の事務局長も務めていただいていたし、その中で働いてくださっている職員の方たちが、事務局員さんがいないときは電話をとってくださったり、いろいろなことをして下さっていたのです。独立したら、今度はこちらで全部そういうことをしなければいけなく

なりまして、事務をしてくださる方もフルタイムでなかなか出られなかったり、そういう金銭的なものから、マンパワーというか、人の参加がこれから難しいところではあります。しかし大変いい場所をいただきましたので、今後は日本人も、外国人も集える場所になっていけばいいなと思ひまして、今日参加して下さっているほかの9名の方たちの活動を先ほどもお聞きしたら、本当に皆さんにこれから身近に一緒にやっていただければいいなという気持ちで、ありがたい機会だと思ひております。

(知 事)

ありがとうございます。府中町にいる外国人の方というのは、どれぐらいいらっしゃるのですか。御存じか分かりませんが、たくさんいらっしゃるのですか。

(小 柴)

人口が約5万人ですが、去年の統計では670人ぐらいですが、ただ、3分の2ぐらいが在日韓国朝鮮の方ですので、本当にこちらで大きくなられて、日本語も堪能ですし、ぱっと見ではもちろん分かりません。本当に日本人と同じように暮らしていらっしゃる方がほとんどで、残りの3分の1のうち、60名ぐらいの方が、マツダの景気云々とか、世界状況でブラジルの方がここ10年で減ったり、逆に今は中国の方がこの10年で4倍ぐらい、すごい勢いで増えています。そういう世界の縮図がここにあるというようなことを、身をもって感じます。

(知 事)

そうですね。先ほどおっしゃったように、今、グローバル化というのは避けて通れないというものでもなくて、もう我々はそこにいるのです。

(小 柴)

そうなのです。

(知 事)

その中で観光客だったり、あるいは国際化といったときに、特別なことではなくて、日常、まさに隣にいらっしゃる人とどうお付き合いするかというレベルのグローバル化が非常に重要になってくると思ひます。特に今、中国の方が4倍に増えているということに端的にあらわれてはいますが、アジアの人たちというのがどんどん世界に出ていらっしゃいます。中国、台湾、インド、あるいはインドネシアやタイの人たちが世界中にいて、ここにいないということであれば、それはここを素通りされているということですので、是非来てもらわなければいけないと思ひています。しかし、そのときに、構えておつき合

いをやっていたのでは長持ちしません。我々としても構えずに、本当に隣人として、ちょっと違いはあるけれども、同じ人間として、普通におつき合いできることをしなければいけないと思います。これが私は本当のグローバル化だと思っていまして、昨年、広島県の10年間の「ひろしま未来チャレンジビジョン」という計画、計画といっても、10年後こんなふうになりたいというビジョンを策定したのですけれども、そういう中でもグローバル化への対応ということを掲げています。即ち、肩肘の張った国際化ではなくて、隣人として、違いを理解して、その上でおつき合いができる、そういうグローバル化をしたいと思っているのです。小柴さんのような活動がまさにそういう活動になってくると思うので、これからも是非お願いしたいと思います。

(小 柴)

はい。本当に府中町の中でも知名度を高めるためにホームページをつくったり、実はちらしをつくったり、あと、こちらで町に登録に来られる外国人の方に、独自でまずは英語の、これから中国語とか韓国語ができればいいのですけれども、そういうものをつくって広めていったり、スタッフになってくださいと知り合いの方を通じてお願いすると、わたしは英語なんかしゃべれんけとか、広島弁しか知らんけとか言われるのですが、実際私たちが活動をしているのは、行事をするときに机を運び、シートを敷き、掃除をして、例えば食事を一緒に食べるのであればそれをつくったり、あるいは注文したり、本当に言語がなくても一緒に日本人同士でやるような活動をするということなので、もう少し皆さんのそういう垣根が低くなって、どんどん参加していただければと思っています。

(知 事)

本当にそのとおりです。そういうのは人間みんな同じで、別に言葉も要らない。ただ、例えばラーメンを食べるときにこしょうを入れますけれども、ラーメンに七味を入れる人がいたり、この間びっくりしたのですけれども、北海道の人はラーメンに七味を入れるのです。「えっ」と言うと「普通じゃないですか」と言われて、びっくりしたのです。日本人でもそういう違いがあります。本当の違いというのはそういうものですよ。

(小 柴)

なので、日本語教室というのも設立当初からやっているのですけれども、まだなかなかそれも知れ渡ってなくて、こんな日本語をただで教えてもらえるのなら早く来ればよかったという外国の方もいらしたりするのですが、これから、ちょうど今日は町内会の代表の方もいらしていますので、そういう方たちにどんどん参加していただいて、日本語の特別教師ではなくても、私たちが広島弁も教えられますし、話をしに来ていただければすごくうれしく思います。

(知 事)

そうですね。この間、海田で日本語教室をやっておられて、すごくたくさんの方がいらっ  
しゃっていました。あれも日本人が先生になっているのですけれども、別に日本語教師と  
かではなくて、普通の人普通の会話の中で教えていらっしゃるという感じでした。是非  
よろしくお願いします。

(小 柴)

よろしくお願いします。ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、失礼しました。津田野さん、お願いします。

(津田野)

北部町内会連合会、防犯組合連合会の副会長、「減らそう犯罪広島県民総ぐるみ運動」で  
府中町の地域安全推進指導員をやっております津田野です。よろしくお願いします。

(知 事)

お世話になっております。ありがとうございます。

(津田野)

ついでに、先ほど水分<sup>みくまり</sup>へ行かれましたけれども、そちらのほうの副会長もやっておりま  
す。

(知 事)

そうですか。どうもありがとうございます。

(津田野)

よく見ていただいて、小林会長が是非水分のことを言っておいてくれということで、一  
言しゃべらせていただきました。

現在やっていることは、地域安全推進指導員として、犯罪情報官速報というのが月に 4  
～5 枚、犯罪情報官から私のところにメールが入ってきますので、それを地域安全推進員  
さんが府中町に 200 名近くいるのですけれども、情報の共有化ということで 1 週間以内に  
全員に渡るような配布方法を考えまして、200 枚ぐらいを配らせていただいております。

あいさつ運動につきましては、8年前、防犯組合の副会長になったときに、府中町には五つ小学校があるのですけれども、小学校の入学式で新1年生に緑のジャンパーと緑の帽子を着た人は安全な人だよということを教えるために、学校ではなく、各町内会の通学路に立っていただいてあいさつをしていただくという活動を始めて、今年で8回目になります。それに伴いまして、各町内会防犯組合で通学路に朝晩、登下校時に立っていただいて、地域の防犯ボランティアの方、現在100人ぐらいの方が登下校時には立っていただいて活動されていらっしゃいます。

それと、こちらは僕の学校区のほうでやっていることなのですが、中央小学校区で、小学校3年生を対象にして、安全・安心クラブ。これは、小学校3年生はまだクラブ活動がないということで、4年生になるとクラブ活動があるので、1、2年で学校に慣れて、3年生でそろそろ地域に出ていくということを学校の前校長から聞きまして、3年生を対象に自分たちの通学路のどこに子ども110番の家があるのか、また自分たちが通う通学路はあそこあそこにあるというのは知っているのですけれども、ほかの子どもたちが来るところは知らないということで、毎年10人ぐらいの子どもたちと一緒に放課後、地域の防犯組合長さんとか地域安全推進員さんと一緒に歩いております。その中でため池とか、駐車場でもちょっと奥まったところとか、そこに車がとまっていると、ここに来てみ、ここに隠れたら、あんたも見えなくなるんだよと、危ないところなども教えながら、それを最終的には3月に子どもたち皆さんに発表していただくという活動をしております。

もう一つやっているのは、防犯ボランティアの方は、自分たちが自主的にやられているものですから、その人たちがいかに気持ちよくボランティア活動ができるかということにつきまして、行政との仲立ちとかをしています。いろいろなグッズ、例えばジャンパーがないとか、1人でもジャンパーがないと、わしはもうやらんという人が出てくるので、1回やらんと言われたら、次にジャンパーを用意しましたからやってくださいと言っても、もうええということになりますので、同時に一斉に配らないとだめだということで、なるべくそういうジャンパーとか帽子とか、なんとか全員にわたるような枚数を集めて一斉に配布するというのもしております。

防犯組合から20枚とか来るのですけれども、地域安全推進員は200人いらっしゃいますので、20枚もらっても、あっちの人だけにやって、わしらにくれんのだったらせんというような声も出ますので、そうすると、ボランティア活動というのはだんだん下火になってきますので、できるだけ全員に一斉に配布するというような、仲介的、コーディネーター的な役割も今のところさせていただいております。今そういうことを中心に活動させていただいております。

#### (知 事)

ありがとうございます。本当に微妙な現場のノウハウではないですけれども。



(津田野)

それをやらないと、なかなか長続きもしないし。

(知 事)

難しいですね。もうちょっと大きな心を持っていただきたいなという気もしますけれども。でも、現実そうやってへそを曲げられると、うまく行かないということもあり。

(津田野)

へそを曲げられるだけならいいのですが、今度は運動そのものを批判されるようなときもありますので。

(知 事)

いつの間にか敵になってしまったりね。

(津田野)

そういうこともありますので、そういう面ではなるべく平等に、病気で倒れられたらおりてもらっても仕方ないですけども、それまではなんとか頑張って、次の人が出てくるまではやっていただくというような、気持ちよくやっていただく環境をつくらないと、なかなかボランティアは長続きしないという気がしています。

(知 事)

人数的にいても 200 人というのは大きな数ですね。

(津田野)

でも、地域安全推進員さんは大体 100 世帯に 1 人と防犯組合で決められていますので、府中町全体で 2 万 9,000 世帯ぐらいですので、290 人、300 人ぐらいいてもおかしくはないので、マンションとかありますので、200 人ぐらい、そのぐらいが妥当かなという気はしております。

(知 事)

そういう意味では、まさに都会の活動だと思いますが、都会なだけに防犯上のリスクと言いますか、いろいろな出来事、あるいは犯罪というのが目立つこともあると思うのですが、いかがですか。

(津田野)

都会と言いましても両極端なのです。ソレイユを中心にするところは都会的な犯罪が多く、先ほど知事が行かれました水分峡の近くというのは。

(知 事)

水分峡は田舎と言うと怒られますけれども、すごい山ですよ。びっくりしました。

(津田野)

水分では、玄関を開けておいても泥棒が入らないぐらいの温度差は多分あるのではないかという気がします。だから、都会なのか、田舎なのか、同じような情報を伝えても、うちのほうにはこんなものはないよというようなところと、現実問題として大変なんじゃということと、全く同じ状態ではないような気がします。

(知 事)

そうすると、それだけ大変な部分もあるということですか。

(津田野)

ありますね。

(知 事)

皆さんの意識が違ったりとか。

(津田野)

意識が違うときはありますね。

(知 事)

今度、県の『「減らそう犯罪」ひろしまアクション・プラン』というのが「なくそう犯罪」になったのです。これは意見がありまして、いわゆるパブリックコメントといって、計画をつくる途中で、インターネット等で、皆さんの御意見をいただく過程があるのですが、その中で、「減らそう犯罪」を「なくそう犯罪」にするのはけしからんと。犯罪はなくせるものではないんだからという御意見で、実はそれが一番多かった意見だったのです。ある人が私に言ってくださいました。「なくそう犯罪」ということですが、それはどういうことかと言うと、今は「減らそう犯罪、なくそう交通事故」なのです。交通事故というのは事故ですから、それこそわざとやっているわけではなくて、どうしても起きるものですが、その交通事故はなくそうと言っているのに、犯罪は人間がやっているのにそれは減らそう

で、なくそうでないというのはおかしいじゃないかと。よく考えたら、確かに犯罪はまさに意図的にやっているのです、なくそうと言ってもいいじゃないかと思ったのです。実際、犯罪者が世の中からすべてなくなるというほど甘い理想を私が信じているわけではないのですが、そういう意図を持ってやればいいじゃないかということで、「なくそう犯罪」にしてくださいと言ったら、県警も快く引き受けてくれて、やることになったのです。今、実は広島県の刑法犯の犯罪数が 10 年前ぐらいから半分になっているのです。そういう意味では、過去の最も少なかった犯罪率に近いところに来ているので、これからまた下げていくのは大変なことだとは思いますが、引き続き、安全・安心なまちづくりに努めてまいりたいと思います。

(津田野)

そうですね。3 年前に府中町長も安全・安心なまちづくりというのを宣言されましたので、あれからなおさらハッパをかけて、と言いたいところなのですけれども、なかなか先立つものもないし、その辺が一番苦勞しているところなのですけれども、一斉にやろうと思うと、いろいろなものがかかりますので。

(知 事)

今は万引きと自転車盗というのが非常に多くて。

(津田野)

多いですね。

(知 事)

これは実は非常に都会的な犯罪なのです。

(津田野)

だから、府中交番の情報を見ても、府中大橋がありますね。あそこから向こうは万引き、自転車盗難が多く、橋からこっちへ来ると、ぐっと減ってくるというような、大体そういう傾向があります。府中交番そのものが矢賀とかその辺も管轄していますので、そうすると天神川とか、新しくできたところがたくさんありますので、その辺の自転車盗難とか、そういうものも増えているので、なかなか府中町全体としては、橋よりこちらのほうが犯罪は少なくなっているけれども、橋より向こうはそんなには減っていないというのが府中交番の県警の意見だろうと思います。

(知 事)

引き続きよろしく願いいたします。ありがとうございます。

それでは、増原さん、お願いします。

(増 原)

よろしくお願いします。増原です。広島県立安芸府中高校の3年生です。府中中学校出身で、中学校、高校と生徒会長を務めました。

今回は生徒会活動とボランティア活動についてお話ししようと思うのですが、私は中学校のとき、学校行事をもっと盛り上げたいとか、みんなの笑顔をもっと増やせないかなと思って生徒会長に立候補しました。学校行事は様々なことがあるのですけれども、中学校のときの学校行事はすごく大変で、一番大変だったのは文化祭でした。夜の10時まで学校に残って作業をして、帰りに先生に送ってもらってという日々を過ごしていて、やっぱり一つ一つの行事が終わった後に、多くの先生や生徒のみんなが、「楽しかったよ。ありがとう」と言ってくれることで、つらいこともいっぱいあったけど、やってよかったなというのがあって、こういう活動をもっと続けていけたらと思っていました。

それで、生徒会活動の中で、さっき樽谷さんがおっしゃられたのですけれども、地域の子どもたちが多く集まるカルタ大会のボランティアを毎年府中中学校と緑ヶ丘中学校の生徒会のほうにお手伝いしてくださいということで、私も参加しました。小さいころに私はそのカルタ大会に何度か参加していて、前に出る大きいお姉さんやお兄ちゃんたちは格好いいなと思っていて、今度は参加する立場ではなくて、自分たちがお世話をしたり、作りあげていく立場になるということですのですごくわくわくしていました。実際やってみると、何回か話し合いなどを重ねていって、カルタ大会をみんなで作りあげていこう、ちっちゃい一人一人の笑顔を増やしていこうという気持ちで、いざ、カルタ大会をやってみると、思っていた以上に子どもたちがすごく笑顔で、「お兄ちゃん」「お姉ちゃん」と言ってくれました。最後終わった後に、「今日すごく楽しかった。ありがとう」と言ってもらえて、すごくうれしくて、今までそんなにボランティア活動とかに参加したことはなかったのですけれども、それをきっかけに、こんなに喜んでもらえるのだったら、もっとほかのボランティアでも何かできることがあるのではないかと考えて、その反省会の際にお世話をしてくださった方に、今回、小さい子がすごく笑顔で「ありがとう」と言ってくれて、またこういう活動がしたいですということを伝えました。そうしたら、それなら安芸府中高校に行くといいよと勧められて、何でかなと思っていたら、安芸府中高校の生徒会にそういうボランティア活動をお願いしているから、そこでまた活動してみたらどうかと勧められました。安芸府中高校を受験して、合格することができたのですけれども、安芸府中高校に入って、生徒会に入り、今度はこども祭りという昔の遊びを子どもたちと一緒にやっっていこうという活動で、中学生のときにやったカルタ大会よりももっと高校生が主体となって小さい子たちのお世話とかをしたりしていく中で、生徒会活動を通してもそうな

のですけれども、ボランティア活動も、自分のためというよりは、まず隣の人や家族、近所の人々の笑顔とか、誰かのために何かをしてあげたいという気持ちがとても大切だなと私は思いました。

(知 事)

ありがとうございます。ちょっとニュアンスは違うのかもしれませんが、情けは人のためならずという言葉があって、人のために何かをするというのは自分に大きく返ってくる。それを、身をもって体験されているというのは貴重なことではないかと思います。

樽谷先生とは接点はあったのですか。

(増 原)

ないです。

(知 事)

時期が違ったのですかね。

(増 原)

はい。

(知 事)

樽谷さんのような先生方がそれをずっと継続してこられたということだと思います。それが地域の伝統として府中町で受け継がれていって、たくさん子どもたちがそういう経験をして大きくなっていったということですね。

増原さんは、これからどういう方向を目指したいと思っているのですか。

(増 原)

今、高校3年生で、広島県内にある大学に通うことになっているので。

(知 事)

もう決まっているのですか。

(増 原)

決まりました。

(知 事)

推薦入学ですか。

(増 原)

AO入試で7月ごろにはやばやと決まってしまうました。

(知 事)

よかったですね。

(増 原)

よかったです。

(知 事)

広島県内の大学ですか。

(増 原)

県内の大学です。

(知 事)

実は、いつも高校生の人に出てもらったら、大学に行くときには広島に残りたいですかと聞いているのです。もう広島に決まっているので、その後、大人になってから広島に残りたいと思っていますか。正直に言ってもらっていいです。お父さんとお母さんは耳をふさいでもらって。

(増 原)

私は、大学を決めるときもそうだったのですけれども、全く話の方向性が変わってしまうのですけれども、4歳のころから府中町の公民館とか南公民館とかでバレエの教室に通っていました。

(知 事)

踊るバレエですか。

(増 原)

はい。踊るほうです。それを習っていて、まだずっと続けているのですけれども、大学に入っても、大学を卒業して社会人になっても、やっぱり踊ることが好きなので、バレエを続けていきたいですし、それに、私はまだ18年しか生きていなくて、広島県のことを

まだ 100 分の 1 も知れていない気がするので、県外に出て働きたいというよりは、広島県で就職して働いて、広島県のことをよく知れて、自分がちょっとでも広島県のために貢献できたら、じゃあ出てもいいかなと思うので。

(知 事)

そんなに優等生にならなくてもいいですよ。もし本当にそういうふう思ってくれているのだったら、もちろんそれはありがたいと思うし、是非広島で働いてもらって、そのまま広島にいてもらおうと嬉しいです。ただ、世の中は広いですから、広い世の中に出て、そこでいろいろなことを勉強することもいいことだと思います。私もそうなのですが、大学から東京に行って、二十数年東京にいましたが、そうすると、逆に分かる広島のよさというのもあります。それは増原さんみたいにふるさとを思う心があったら、多分どこに行っても同じだと思うのです。

何でこの質問をしているかという、今の広島県の現状は、現実を見ると、若い人、特に 20 歳から 24 歳、いわゆる大学ないしは大学卒業後に就職をした人が毎年約 2,500 人から 2,700 人の出超なのです。つまり、赤字なのです。来る人もいます。近隣の県から来る人もたくさんいるのです。九州からもいます。だけど、出る人のほうが多いというのが現実なのです。若者にとって魅力ある広島県をつくっていくというのは非常に大きな課題なのです。我々も一生懸命魅力が高まるように頑張ろうと思っているのですけれども、ただ、無理矢理ひもをつけて「おまえ、残れ」といって、残ってくれる話ではないので、そこはみんなの正直な意見を聞きたいと思っているし、逆に、大人の人みんなに聞かせてあげないといけないと思うのです。現実はそのやっつけ出超であるので、やっぱり魅力が足りないということだと思うのです。そういった現実を見た上で、私たち大人は考えていけないといけないと思っております、それで聞いています。でも、増原さんが残りたいと答えてくれたおかげで 8 対 7 かな。

(事務局)

9 対 7 です。

(知 事)

よし。9 対 7 で残りたい派が多くなっています。ありがとうございます。

(増 原)

ありがとうございます。

(知 事)

それでは、三浦さん、お願いいたします。

### (三 浦)

南部町内会連合会の三浦と申します。よろしく申し上げます。

湯崎知事が、広島県が日本で一番住みよい県になればとお考えになられているように、私も府中町が一番住みよい町になればと考えています。今日はまちづくりということで、私がかかわっている向洋駅周辺まちづくり協議会についてお話しさせていただきます。

ちょっと原稿を読ませていただきます。向洋駅周辺地区は、これまでJR向洋駅を中心に発展し、マツダ株式会社本社、マツダ病院など、中心市街地に必要な機能が充実していることから、人口が集積しており、府中町においても重要な拠点となっています。ただ、近年はキンビール跡地へのイオンモールソレイユの進出などにより、にぎわいや魅力が低下してきています。このような中、府中町の南の玄関口として機能強化を図るとともに、それにふさわしい市街地と暮らしやすい環境の整備が計画され、現在、向洋駅周辺土地区画整理事業と、広島市東部地区連続立体交差事業が実施されています。私ども生活者、利用者の視点に立ったより利用しやすく、にぎわいのある環境整備を進めていくには、道路、公園にしても、単に整備するだけではなく、まちづくりという観点から、私たちが生活していく場としてのまちを育成していくための計画が必要だと考えられます。

こうした状況を受けて、地域住民と学識経験者、行政、企業が一体となって検討する場として、平成21年7月から22年3月までまちづくり協議会が設置され、その部会活動として景観部会、商業部会がワークショップという手法で開催され、計画づくりが進められました。ちょっとワークショップの内容もと思ったのですが、割愛させていただいて、部会のワークショップを行う中で、町の職員さんからいろいろ現地の状況を説明していただいたのですが、特に高架事業では、高架下の使い方が重要になるので、できれば県の方々からお話を伺いたかったと思います。

この話し合いを通じて再度残念に思ったのは、区画整理が連続立体交差事業の7年延伸を受けて、延び延びとなっており、高齢化する地域住民としても感情的にならざるを得なかったこと。また、それにより、府中町地元地権者の方々の計画、生活再建に大きな支障が出たということです。是非これ以上の延伸のないことを願っています。

この協議会がきっかけになり、関係町内会も自身の問題ととらえ、まち育ての気運が高まっています。住民としてまちづくりの計画づくりにかかわり、私たちの役割についても認識でき、同時に将来イメージも湧いてきました。特に活動の中で強く印象に残っているのが、協議会の会長さんがおっしゃったまちの使い方とまち育てについては、生活者である私たちと基盤整備をする行政の話し合いが大切であるということです。

その後の活動なのですが、商業部会に参加された商店主の方々が新しい商店街を結成されようとしています。私たち協議会も、また、向洋のまちづくりのために活動を再



開しようと思っています。

今、私たちはまちができていくまでいろいろ活動していかなければいけないのですが、今後、町の方に相談しながら、よりよいまちづくり、育てていくための活動がしたいと考えております。県の方にも御協力をいただいて、御指導いただければと考えております。以上です。

(知 事)

ありがとうございました。まちづくりにそうやって密接にかかわっていただいているのですけれども、今、いろいろな地域で、まちづくりあるいは町内会といった活動がなかなか大変になっています。参加される方が減ったりとか、リーダーになる方が少なかったりと、大変な側面があるのですけれども、それはあまりお感じになられることはないですか。今、連続立体交差事業の問題があるので、それが一つの中心課題として、皆さん関心の高いところはあると思いますが、いかがでしょうか。

(三 浦)

どこも問題だと思うのですけれども、確かに町内会の存在自体を疑問視される方もいらっしゃると思うのです。でも、先ほど北部の津田野さんがおっしゃったように、防犯にしても、子どもたちの見守りとか、お年寄りの方々の孤独死などありますよね。そういったことを見るにつけ、やっぱりコミュニティーというのは大事なことだと思うのです。これからこのまちづくりでいろいろ編成が変わりますので、ますますそういったことは大切になるから、各町内会長さんは大変だと思うのですけれども、頑張っていたきたいと思っております。

(知 事)

そうですね。今、連合会ですからいろいろな町内会があると思うのですけれども、南部では町内会長さんのなり手に困っていらっしゃるとか、そういうことは起きていますか。

(三 浦)

起きていますね。マンションだと、順番に各町内会長になるというところもあります。

(知 事)

なるほど。でも、逆に、それができるところはよくて、なり手がなくて、20年町内会長をやっていますとか、そういうところが結構あるのです。

(三 浦)

確かにあります。私も、前の方がもう御高齢になられたということでバトンを引き継いだのですが、もう 8 年になりますが、まだ続けています。

(知 事)

次のなり手の方が少ない。

(三 浦)

少ないというか、お勤めの方が多いので、町内会活動をやっていく上では結構時間が必要ですので。

(知 事)

そうですね。そういう時間がとれない。

(三 浦)

はい。一応何人か候補者は、この人に次にやってほしいなというのは心の中では決めて、その方が退職されるのをじっと待っています。

(知 事)

なるほどね。退職がチャンスなわけですね。

(三 浦)

はい。

(知 事)

今は退職年齢でも、皆さん、お元気ですからね。

(三 浦)

そうです。

(知 事)

なるほど。そうやってつかまえるのが大事なのですね。ありがとうございます。

立体交差の件では御迷惑をお掛けしておりますけれども、今、市や、関連の海田町等と協力しながら進めておりますので、また御理解をよろしくお願いいたします。

(三 浦)

こちらこそよろしく願いいたします。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、村竹さん、お待たせいたしました。よろしく願いします。

(村 竹)

私は府中町脱温暖化市民協議会の村竹と申します。よろしく願いします。

これから私たちの活動の一端を紹介させていただきます。私たち協議会は、平成 14 年に広島県で一番早く設立されまして、地球温暖化防止に賛同する町民の皆さんや公衛協などいろいろな団体、そして事業者、行政と協調しながら、脱温暖化のまちづくりを目指して活動しております。

活動のねらいは、町民の皆さんが温暖化についてよく知り、そして行動につなげていくために、小学校をはじめ、地域の皆さんを対象に出前学習会を開きながら、ともに学び、ともに活動しております。

温暖化に向けた具体的活動を推進するために、いろいろな活動を続けています。火災跡地への植樹活動や省エネトライアル、レジ袋の削減運動、また、昨年度は生ごみの削減活動、今年度は町内全所帯を対象に環境意識アンケートを行い、従来の活動に加えて、新しく府中町版の環境家計簿をつくり、これを切り口に省エネについての関心を高めて、活動の輪を広げていこうと頑張っております。

活動をより効果的に進めるために、府中町独自の環境地域通貨エコマネーを発行し、これをツールとして活用しながら、楽しく活動を進めております。

獲得したエコマネーは、町内を循環するつばきバスへの乗車や、ジャスコさんの協力で、環境商品との交換、また、町内イベントでも楽しく使ってもらい、環境に優しい活動に生かされております。

地球温暖化がますます切実な問題となる中で、これまで粘り強く続けてきた活動が少しずつでも地域の皆さんに理解され、活動の輪が広がりつつあることを励みに、一人一人の行動がいかに大切かをみんなで学び、活動の輪をさらに大きく広げていきたいと思っております。

もう一つ、地域の環境衛生活動なのですが、榎川を蘇らせよう会の活動についてちょっと紹介します。榎川は私たちの住むまちの真ん中を流れるかけがえのない用水として、流域の多くの人に親しまれてきました。急激な人口増加とともに、家庭排水やごみの散乱など、いろいろな悪条件が重なって、かつてのようにホテルが舞い、たくさんの魚や生き物と遊ぶ子どもの姿はすっかり見られなくなりました。

そこで、上流からのきれいな流れを下流までを合い言葉に、同志を募り、9名で活動を始めました。これが平成 13 年にまちの環境基本計画のシンボルプロジェクトの一つにな

り、まちの暮らす場支援事業や、サニクリーンさんからの支援をいただいて、水質浄化活動に取り組みました。汚染物質の一つである米のとぎ汁を、微生物を介して発酵させ、浄化物質に変えて放流する活動や、町内会に呼びかけ、河川敷の草刈りや散乱ごみの回収など、続けるうちに賛同する人も次第に増えて、定期の清掃活動にはたくさんの人が参加してくれるようになりました。

また、支流にあたる二つの大きな団地にも活動を働きかけ、活動拡大を図っています。

この活動が榎川のみにとどまらず、温暖化防止活動をはじめ、いろいろな環境活動に参加するきっかけになり、コミュニティーづくりの大きな力になっております。これで終わらせていただきます。

(知 事)

ありがとうございます。本当に環境、CO<sub>2</sub>もそうですし、榎川というのは本当に身近な環境で、大変な御尽力をされていると思ったのですが、エコマネーのほうは、いわゆる金額ベースですね。ジャスコで交換できるということは、ある程度の価値があると思うのですけれども、年間幾らぐらいエコマネーが出ているような感じなのですか。

(村 竹)

資料を持ってきていたのですが、ここに持って上がるのを忘れました。

(知 事)

そうですか。イメージで結構なのですかけれども。

(村 竹)

600点ぐらいジャスコさんが負担してくれて、まちが500点ぐらいで、ジャスコさんがちょっと超えているというような状況です。

(知 事)

金額的に言うと、何万円とかなのですか。

(村 竹)

100efと50efというのがあるのですけれども、エコマネーができたときは遊び心があって、1億という値で表示されていたのですが、現実のものと大体似たようなものにしてということで相談して、100円と100efというようなものにしたということです。バスに乗るときは100円で100efを払って乗ってもらうという格好です。ジャスコさんの場合は、環境商品、いろいろなものを用意してくれていますが、結構みんな活用して、助けてもらっ

ています。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

環境保護の活動というのは地道だと思いますし、活動の輪が広がるというのは、まさに地道な努力が必要だと思うのですが、継続の鍵というのはどういうところにあるのでしょうか。あるいは、活動が拡大していく鍵というのは、どういうところにありましたか。

(村 竹)

やっぱり仲間づくりが大事なことではないかと思います。

(知 事)

やっぱり関心を持たれている方が多いですか。

(村 竹)

そうですね。温暖化などの場合はもう随分長いですから、初めから活動に加わってくれた人は、乾いたぞうきんを絞るような状態で、もうやることがないというような意見もあるのですが、まだまだこのたびのアンケート結果などを見ても、無関心層がかなりあって、そういうふうなことで、現在は新規の無関心層の開拓ということに力を入れて、出前講座をやりながら、環境家計簿によって関心を持ってもらおうという活動を続けています。

(知 事)

手応えはいかがですか。

(村 竹)

今まで小学校とかの大きいところで出前講座をさせてもらっていたのですが、今年はずっと小さいグループの、5~6人とか、夜でも来てくれというようなところへ出向いて行って、一番参加しやすい生活に密着したようなことから始めて、そういうふうなことで活動しております。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

## 自由討論

(知 事)

これで一通り御発言をいただきました。残り 20 分あるので、皆さんで少し意見交換をさせていただければと思います。私が質問させていただきたいことが幾つかあるので、そこから始めさせていただければと思うのですが、まずミニアンケート調査で、10 人の方で府中町御出身の方というのは、4 人、半分ぐらいいらっしゃるんですね。その他、広島以外の御出身の方は、米田さん、小柴さん、山本さん、3 人。大体これぐらいの割合が代表的な感じですか。半分弱が府中町御出身で、半分強がそれ以外というイメージですか。高校の同級生などはどうですか。同級生は大体府中町御出身ですね。府中町は人口の移動がとても激しいところなので、そういう意味でまちの求心力づくりというか、まちのアイデンティティーという言葉がありますけれども、わがまちはこういうまちだということがつくりにくい部分もあるのではないかという気もするのですけれども、それはどういふふうにお感じになりますか。どなたか御意見があったら、村竹さん。

(村 竹)

私は先ほど話がありました水分<sup>みくまり</sup>のほうに住んでおります。水分あたりは、昭和 30 年代は川沿いに 45 軒ぐらいいか家がなかった。ほとんど田んぼだった。というところから今は 500 軒ぐらいになり、山沿いにまた団地ができて、1,000 世帯を超えるまちになっておりますが、さっきも言いましたように、清掃活動など皆さん非常に協力的ですし、先ほど言われましたような地元の方と新しく入ってこられた方との差というのはほとんど感じられません。

(知 事)

そうですね。どなたかほかに御意見は、津田野さん。

(津田野)

一軒家のあるところと、マンションがぼんと建っているところでは、それだけの差があるのです。村竹さんのところは一軒家ばかりで、隣同士簡単に話ができる。私はこの近くに住んでいるのですけれども、大きなマンションがたくさんあって、なかなかそこの中には入っていけない。町内会の活動も、じっくりと腰を据えてやらないとなかなか出てきてもらえないとか、そういうところがありますので、そういうところでも府中町の中の地域差というのが結構あるだろうと思います。そういう意味では、日本全体を見ているみたいで、おもしろいのはおもしろいですが。

(知 事)

縮図になっているということですね。なるほど。どなたか、いかがですか。三浦さん、どうぞ。

(三 浦)

隣の村竹さんは山の人で、私は都会の人なのです。南の一番端に住んでいるのですけれども、津田野さんがおっしゃったように、村竹さん家のほうはサルが出たり、イノシシが出たりするようなところなのですけれども。

(知 事)

確かに今日水分峡に行ったら、イノシシが掘った跡がすごくありました。

(三 浦)

その反面、私たちの住んでいるところは、私の子どもころ、ちょっと前なのですけれども、そのころは、すごくにぎわいがあり、大都会だったのですけれども、だんだん構成している人が高齢化してきて、お年寄りになってきて、これじゃあいけないねと再生する地域になりつつあるのです。さっき府中町はおっしゃったのに、田舎でどんどん元気になるところ、今、元気になるところ、もう老齢化している府中町、でも、今から元気になるぞという府中町だと思うのです。

(知 事)

なるほど。津田野さんと同じ御意見で、いろいろ地域によって違うということですね。

(三 浦)

はい。

(知 事)

小柴さん。

(小 柴)

私は隣の山口県出身なのですけれども、結婚を機に主人の仕事の関係でこちらに来まして、先ほどの津田野さんや三浦さんのお話ではないのですけれども、最初は社宅というか、マンションに近いアパートのような暮らしを最初の5年間ぐらいしてしまして、そのときはそこだけが町内会で、今は一軒家になって、実は先ほど言われた水分の最後にできた団地の本当に新しいところ、でも、20年近く住んでいるのですけれども、それを全部経験し

ました。子どもにとっては水分峠がすぐ近くで自然があり、市内が大変近くて、もっと都会のイメージで府中町に越してきたのですけれども、実は、お祭りにはおみこしを町内会の方の御協力で子ども会が出し、亥の子祭りがあり、日本のよいもの、田舎のものも大切にしながら都会であるというところが、子育てをされていてとてもよかったという印象です。だから、そういういろいろなものを持っているというのが府中町のいいところだと、県外から来たものとしては感じております。

(知 事)

なるほど。米田さん、お願いします。

(米 田)

広島市と岡山市を比べますと、岡山市は平野が広くて、各施設が分散しているのです。今回、政令指定都市になりましたけれども、広島市はどっちかという山で、平野が少ないので、施設が集中しているのです。ですから、そういうまちづくりがやりやすいのです。

府中町も、例えば商店街、今度ソレイユができましたので、どちらかという、そちらがにぎわっている。従来ある府中町の役場周辺商店街、向洋駅前、マツダの本社があって、ここがもうちょっと頑張らなければいかんのですけれども、府中町がもっとまちづくりに向上するには、その辺の商工会議所とかの連携とか、その辺が要るのではないかと私は思っています。

(知 事)

なるほど。ありがとうございます。樽谷さん。

(樽 谷)

一番いいのは、学校なのです。学校を活用するというのがいいと思うのです。私たち学校にいたものは、何でもかんでもみんな学校に来るので、それですごく負担になるというか、困るというのもあるのですが、でも、一番子どもたちにいろいろなことを教えよう、広めようと思えば、やはり学校だと思うのです。先生の一言によって、子どもの関心というのはすごく違うのです。何かに参加するにしてもそうだと思うのです。また、一緒にすることによって、その世代観というか、そういうふうなものが生まれてくると思うのです。だから、子どもの放課後の使い方、例えば今、小学生だったら、昔の小学校は夕方、すごく子どもたちが遊んでいたのです。今はそういう姿はほとんどない。帰らされる。帰らないといけませんということになるのです。その帰った後に、地区センターに行くなり、そこらあたりで何かがあれば、私はすごく生かされてくると思います。そういう学校で部活以外のものをやりたい子、学校では限られていますから、自分の好きなもの、趣味的なも



の、今みたいなバレエを続けようであるとか、お料理をしたいとか、そういうふうなことであれば、そういうところに行ってするような条件整備とか、そういうふうなものができたら、子どももすごく生き生きしてくると思うのです。さっきの食育ではないけれども、そういうところで習ったお料理を家で作ったりすると、自分が大きくなって、下宿しても料理ができるとか、文化的なものにしても、できることがあると思うのです。そういうふうな放課後のあり方というものをもっともっといろいろな面で工夫されたいなと思います。学校でも部活以外、帰宅部ではないけれども、子どもは早めに帰って勉強するかとって、するわけではないのです。だから、その時間を何に使うかというところが一番大切なところだと思います。だから、今みたいに児童センターであり、地区センターであり、そういうところの活用。学校でもそうだと思うのです。さっき出前授業と言われましたけれども、どんどん学校に来てもらって、来て指導してもらおうというチャンスが増えれば、すごく子どもの交流にもなって、私はいいと思うのです。

朝でも立ってあいさつ運動に出ます。そうすると、子どもたちは、特に月曜日になると、知らない人でもすごく声をかけてきます。昨日何があったとか、どこに行った、カーブがどうなったということをおばちゃん、おじちゃんたち、まちに出ている方に話をしています。特に小さい子どもほど、親以外の人に話したいという意欲を持っていると思うのです。そういうのを親も、周りも摘んでいるような気がするのです。だから、そういうものを何か、今、ちょっと余裕ができたときに生かしたいと思うのですが、なかなかいろいろな面で、今ごろは話をしちゃいけないとか、声をかけてはいけないと言われる中で、難しいところはあると思います。

(知 事)

そうですね。緑の人じゃないとだめだとかね。

(樽 谷)

そうですね。そう思います。

(知 事)

ありがとうございます。子どもたちを通じてということですね。学校の数が少ないですから、特に中学校は2校で、そうすると、いろいろな地域から集まってくるということもあって、そこでまた融合していくということもあるということでしょうかね。

私は実は五日市で育ったものですから、ある意味でいうと、府中町と似たようなところがあるのですが、五日市はもっと巨大です。人口も10万人いましたので。確かに田舎なのだけれども、都会のところがあって、人間関係は基本的には都会的だったように思います。今のお話をお伺いしていると、そうは言っても、地域的につながりがあるところもあっ

たり、もちろんマンションが大きく占める地域はなかなか難しいところもあるかもしれませんが、私も府中町のイメージは非常に都会的というのが強かったのですが、必ずしもそうではないということを改めて認識させていただきました。

全く関係ない話になりますが、実はなぜか今日、皆さんきちんとした服装をされていて、私は冒頭申し上げたように、普段はもっと気楽な格好で来るのですけれども、お着物、しかも、男女お二人がお着物で、このためにというわけではないですね。

(樽 谷)

私はどうしようかと思っていたのですが、初めは服で来るつもりだったのです。昼前ごろになって、さっきのお茶会の話で、私も今日お茶会だったのですが、キャンセルして来たので、着物を着て行く日だったのになと思うのと、学校を辞めて、着付け教室も行っているし、今日は新春だし、着物を着て行く手もあると思ったもので、そういうふうな平生のお勉強の披露と思って着て参りました。

山田さんは、着物が好きなんですね。

(山 田)

一応正月と1月だけは和服で、出ていくときには和服です。家では作業しやすい格好をしておりますが、家内も煎茶をやっておりまして、そちらにもちょくちょく出向いていくものですから、1月だけは和服を着るようにしております。

(知 事)

なるほど。そういうことですね。私はきちんとした服装をされるというのが府中町の特徴なのかと。

(村 竹)

私もどういう服装で行ったらいいかとインターネットで調べてみたら、ラフな格好をしておられたからどうしようかと思ったのですが、もし皆さんちゃんとしておられたら困ると思って、ネクタイを準備して。

(知 事)

ネクタイをすれば、今度はスーツを着にやいけんようになると、そういうのですか。田中さんはさっきの格好のまま着ただけであればよかったと思ったのですが、

(田 中)

午前中が普段の自分なので、午後、今は公式的。やっぱり県知事をお迎えするのに、普

段着で失礼があってはいけんと思って、午前中もスーツを着てお迎えしようと思ったのですけれども、会員の女性の方に、「やっぱり普段の田中さんを見てもらって、昼からぴしっとして行ったら、めりはりがいいのではないか」と言われて、両方見ていただきました。

(知 事)

なるほど。それぞれにお考えがあつてということで。今日はたまたまなのですけれども、男性はもちろん、和服の山田さんはもっとフォーマルですね。

(山 田)

剣道もしておりますし、剣道と一緒にですから。

(知 事)

そうですね。でも、全員ネクタイをしているというのはめずらしいというか。

(米 田)

知事をメディアで見るとはのですけれども、テレビとか、やはり正装、ネクタイなので、私はいつもジャンパーで、正月、お盆ぐらいは背広を着るのですけれども、今日も迷いまして、でも、メディアで見るといつもネクタイをされているので、今日は背広でネクタイでないとまずいかなと思って。

(知 事)

今日は私が期待を裏切ってしまうてすみません。

最後になりますが、何かせっかくの機会なので、こういうことを聞いてみたいとか、こういうことを言いたいとか、そういうのがございましたら。

(津田野)

ここにいらっしゃる方は、県単位のいろいろな会議があるのですけれども、町内会とか自治会単位は、その自治体単位で終わってしまって、県単位の連合会が何も無いのです。いざとなったときには、府中町もいろいろなことを町内会に頼むと言って来られるのですけれども、府中町の中の連合会はあるのですけれども、県単位のほかの福山市とか三次市とか、そういうところの町内会とか自治会がどういう動きをされているのか、というのが年に1回、南部も北部も研修旅行に行きますが、でも、それは県外に行きますので、県内の連合会みたいなものをちょっとつくっていただければ、そこでいろいろ各連合会、町内会でいろいろなお話できて、ああ、そうか、そっちのほうではそういう具合にやっているのかというお話もできるのではないかと思います。防犯組合などは県単位の連合会が

ありますので。

(知 事)

ありますね。

(津田野)

そこで、うち是这样やっているという話がときどきできるのですけれども、町内会はそういうのが全くないので。

(知 事)

私も深く考えたことはなかったのですけれども、都道府県で町内会の連合はないのですか。市町単位ですか。

(津田野)

市町単位でやっておられますので、束ねるといのはなかったです。

(知 事)

そうすると、確かに他の地域がどういう感じてやっているかというのは分からない。町内会という名前じゃなくて、全然違う名前のところもありますからね。

(津田野)

町内会でも自治会でも別に名前は何でも、地区をまとめている単位であれば。

(知 事)

そうなのです。それ自体多様性があって、実際にいろいろなところに行くとおもしろいのですけれども、自治会とか町内会とか全然違う名前がついているところもあるのです。いろいろ多様なのです。分かりました。非常に参考になりました。ありがとうございます。ほかにどなたかございますか。小柴さん。

(小 柴)

先ほども申しましたけれども、こうやって皆さんボランティアでやっていらして、そのボランティアでやっていることを、さっき湯崎知事は見に来てくださったのですけれども、トップの方だけではなく、町行政とか、公務員の方たちが、もう少しこういうボランティア活動に、本当に余暇を利用してかかわっていただきたいのです。お忙しいでしょうけれども、本当に普段着でかかわっていただけると、それがそのまま行政の御自身の仕事に、

私たちがクレームなり、要望を持っていくことも大事なのですけれども、実際現場に参加していただいて、提案とか、いろいろ困っていることを自らの目や耳で聞き取っていただいて、それを仕事に活かしていただければ、それが一番うれしいなと思うことがあります。こちらからいつもこうしてください、ああしてくださいと言うことが多いですので、それを是非やっていただければと思います。

(知 事)

ありがとうございます。自ら経験すると、その御意見もよく分かるということもありますよね。

(小 柴)

そうですね。それで、実際にこちらからの要望というのは、やはりその業務に携わっていない方たちにとっては突然ですので、例えば外国人の話をしたら、それはどれぐらい、何人困っているのかとか、実際にどういう、例えば署名なのか、何かを提示してくださいと言われても、こちらとしては本当に近所で聞いた話とかだったりするのです。英語での、あるいはほかの言語での資料が必要ですよということを持っていても、行政の立場からすると、そういう声が多くないとすぐに動けませんとか、それもすごくよく分かるのですけれども、資金的にも人的にも、積極的に、国際交流協会だけではなく、ほかのいろいろな町内でやっている活動に参加していただければ。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

山本さん、今の御意見でいかがでしょうか。幅広の活動をされていると思うのですけれども、そういうふうにお感じになられることはありますか。行政の人も直接入ってきて、一緒にやったらいいのではないかと。

(山 本)

今たちまちというのはないですけれども、私自身が所属している夢プランとか、食育プランのプロジェクトは、実際に学習しながら実践活動につなげていくということが多いですけれども、むしろ、行政に対してというよりは、これからは団塊世代の方々がどんどん地域に帰ってこられたりして、町民の方とか、そういった方たちが地域にどんどん出ていってくれるといいなというのを思っています。

(知 事)

職場だけではなく、これからは地域にかかわっていくと。

(山 本)

はい。そのためにも、こういう学びながら実践するというスタイルが、私は本当にこういう活動にかかわれてよかったと思っています。そうして考えたときに、私たちの調査した結果では、働き盛りの方が例えば地域に参加するとか、あるいは、先ほど言いましたような団塊の世代の方々が定年を迎えられて、というふうなときの場所づくり、そういう場所があればいいなと思うし、また、そういったときにもっと自分が役立てるといいなと考えています。

(知 事)

ありがとうございます。行政もちろんですけども、スタートである住民の皆さんももっともっと参加して、地域の中で活躍していただきたいということですね。

(山 本)

そうですね。やはり双方向で何か、いろいろ伝えながらできるといいのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。先ほども申し上げたように、「ひろしま未来チャレンジビジョン」にもありますが、広島県がこれから変わり、もっともっと活性化していかなければいけないのですけれども、実際にその力を持っているのは住民の皆さんだと思うのです。それは経済活動でも、社会活動でも、教育でも、あるいは医療とか福祉でもそうだと思うのです。例えば教育の場合にはかなり学校のシステムというのがもちろんあって、それが県の教育委員会から来ている部分もあるのですが、やはり地元の皆さんとのつながりの中での教育というのは非常に重要です。先ほどのボランティアの話もそうだと思いますが、あるいは医療にしても、経済活動というのは行政が経済活動をするわけではないので、やっぱり発展していくためには企業がそれぞれ頑張らなければいけない。あるいは、個人の事業主さんが頑張らなければいけないということで、県民こそが広島県を変えていく原動力であると思っています。我々としてはなるべくでしゃばり過ぎないで、それを下から支える。もっと加速をする。そういう役割が果たせればと思っていますところ。そういう意味で、是非皆さんにおかれては引き続き御協力いただければと思っていますので、よろしくお願いいたします。

## 閉 会

(知 事)

それでは、ちょっと時間も過ぎてしまいましたので、これで終了とさせていただきたいと思えます。本当に長い間、2時間強の間、貴重な御意見を賜りまして、本当にありがとうございました。

冒頭申し上げましたように、いい味噌にして、おいしいみそ汁とか、お料理をつくりたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

また、今日傍聴の方にもたくさん来ていただいておまして、本当にしゃべる我々と違ってずっと聞いていらっしゃると大変お疲れのことと思えます。こうやっていろいろなお話を住民のたくさんの方がお聞きになるのも大事なことだと思えますし、先ほど申し上げたように県民主役ということで我々やっていきたいと思っておりますので、傍聴の皆様にもまた御協力いただければと思っております。

ということで、皆様本日は本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。